

テモテへの手紙― 2:1-6 「御言葉と祈りの輪を広げよう」

2024年4月7日(主の日)

今年もイースターを迎え先週イースターの主日礼拝をおささげしすることができました。そうして、このように新しい年度の歩みを始めることができて、主に感謝します。イースターの説教でも語られましたが、わたしたちキリスト教会のこの日曜日の朝の礼拝は、主がご復活なされたのが週の始めの日の朝だったことにねぎしています。そう考えますとイースターは年間の一つの行事にすぎないのではなく、毎週のこの礼拝がイースターだといってもよいことです。今年度も主日の礼拝を確かにおささげし、そこで主イエスが出会ってくださる、語られる御言葉の中でこそ出会ってくださる、この恵みを喜びとし、全生活の中心として歩みを続けていきたいと祈るばかりです。

ここ数年、年度の最初の主の日の礼拝の聖書箇所は年度聖句として、年度主題の説教としてしています。とてもよい箇所、触れないわけには行かないと思い、予告の2:1を6節まで伸ばして聞くことにしましたが、年度聖句は第一節の後半のみです。「願いと祈りと執り成しと感謝とをすべての人々のためにささげなさい」。これからの藤沢北教会のあり方、求めるべき姿をみごとに言い表した聖句だと思います。

コロナ感染症の蔓延の下に丸4年過ごしたことになります。感染症自体はいまだに注意すべきことですが、それでも対処の仕方もわかってきたことで、教会の活動もかなり制限をはずすことができました。換気、手指消毒、マスク推奨の対応だけで、活動そのものはほとんど制限なしに行ってよいだろう、ということです。そしてイースターには久しぶりに愛餐会を行うことができました。みんなでつつくような形の食事ははばかれるということで、料理を作ってくれる奉仕者には丁寧な対応をしてもらい、教会が注文したサンドイッチとあわせて食事をしました。なによりもこうして礼拝に参加したわたしたちが食事を囲んで交わりの時を持つことができたことがほんとうにひさしぶりで、嬉しいことでした。

コロナのあいだは、できるだけ接触を少なくしなければならない、その時に省略していいもの、いつきなら省いていいもの、どうしてもなくしてはいけないもの、そういうことを信仰にたちかえって判断し、短い礼拝にする、讃美歌や詩編交読は短縮、省略はできるけれど、説教はけずらない、という判断を長老会はしました。礼拝以外のところでも、一時期はすべての集会を中止し、必要なものはウェブ開催をすることにしました。会うことができない人には、説教の原稿の送付、あるいは動画の配信というかたちで、とにかく御言葉だけはなんとかして聞き続けることができるように、と長老会は御言葉を届けることに注力したのです。けれどもそこで失われたものは礼拝の豊かさと交わりでした。礼拝については今後少しずつ以前の形を基本として戻し、しかし、単にもとに戻すのではなく、より豊かな礼拝となるようにと求めていくことにしています。幸い、全国連合長老会が新

しい式文を昨年度発行しましたので、そこからよいところを採用しようと検討しています。礼拝を大きく変更することになるかもしれませんので、十分に時間をかけて準備をします。

もう一つの交わりについて、わたしたちが取り戻したいと思っていることです。教会は交わりを大切にしてきました。愛餐会も、みんなで囲む食卓というのは聖書にさかのぼる、旧約まで遡り、その後も教会が大切にしてきたことです。礼拝でみ言葉をいただき、そこから送り出される信仰者は、神と人を愛する者とされます。ですからどうしても人との交わりをつくらないわけにはいかないのです。主は隣人を愛するように、とおっしゃったのですから。わたしは自分が礼拝にでて、御言葉をきけばそれで満足です。人との関わりなどわずらわしいのでひとりで生きていきます、ということはありません。しかし、教会の交わりは単なる気の合う人をつくる会合やサークルではありません。子ども会や趣味の会、敬老の会などではありません。わたしたちは礼拝から送り出されて御言葉を分かち合う信仰の交わりを作ります。それが教会を作ることだ、と聖書は語るからです。

年度聖句として与えられましたこの御言葉を記しましたテモテへの手紙一は手紙二とテトスへの手紙とあわせて牧会書簡と言われます。もともとはテモテやテトスに代表される教会の指導者がどのように牧会をするべきかを教える書物です。しかし、単に宣教者、牧師、長老という名前のついた教会の指導者だけでなく、教会そのものがどのようにたてられるのか、ということを経験者だれもが聞くべき書物となりました。この手紙一の第一章からわかることは、エフェソの教会におかした教え、あやまった教えを吹き込むニセ教師が教会に入り込んで活動していたようです。そのような教えにまどわされないようにと、教会の指導者が正しく教会を導けるようにと教えと励ましが語られます。

手紙の著者はイエス・キリストに立ち帰るようにと、著者が自分がかつて罪人であったのに、主イエスのあわれみによって救われ、立ち返らされた自分自身のことを語ります。「キリスト・イエスは、罪人を救うために世に来られた」という言葉は真実、そのまま受け入れるに値する。永遠の王、不滅で目に見えない唯一の神にほまれと栄光を！と神を賛美します。

しして、1節にあるように「まず第一に勧め」るのが祈りなのです。教会の交わりは単なる気の合う仲間の集まりではないといいましたが、そこをはっきり区別するのが祈りです。「願いと祈りと執り成しと感謝とをすべての人々のためにささげなさい。」この言葉の理解には2つの仕方があります。一つは、願い、祈り、執り成し、感謝を祈りの基本的な要素とする、という考え方です。もう一つは祈りを全体に考えるという考え方です。

4つのことをそれぞれ考える場合。まず願い。わたしたちは、神に願ってよいのです。自分の必要なものを熱心に願って善い。求める者に神は必ず与えてくださる。祈りが続きますが、神に願うことは祈りの中身の一つですから、願いと祈りはあまり分かれていないと思います。神がかならず与えてくださると心から信頼して祈ることがゆるされています。もちろん、まことに成就するのは神の御心ですから、じぶんの願いがそのまま叶えられる、ということが保証されているわけではありません。ときに自分の願いがかなえられない

ように思える時もあるでしょう。けれども、祈りは叶えられないところからが本番だ、と神学校の先生は語られました。自分の祈りが聞かれなかったところにこそ、神のみ心を求める事をするからです。自分の願いがかなえられたのは、神の御心がそこにあった、というだけにすぎない、とも言えます。主イエスがおしえてくださった主の祈りは、「御心がかのうように」との祈りです。主イエス御自身もゲツセマネの祈りにおいて、死の定めから逃れさせてほしい「この杯をすぎさらせてください」と祈りながら、しかし「わたしの願いではなく父よあなたの御心がなりますように」と祈られたのです。それほどまでに神を信頼する。祈ることがわたしたちの信仰のあらわれであり、どれほど大切なことかがよくわかります。そして執り成し。祈りは自分のためだけにするものではありません。誰もが必要なものをいただけるように、お互いのために願いをささげるのがわたしたちの祈りの心です。執り成しとは人と人との間をとりもつことです。この人の願いをきいてやってくれませんか、と変わりに頼むことです。祈れない人、祈りを知らない人がいます。その人達のために自分のことはいったんおいておいて代わりに主に祈ります。また、悲しみや混乱あるいは怒りで祈るべきことがわからなくなってしまっている友がいるかもしれない。そういう友のために祈るのです。あるいは、単に一緒に祈る、ということも執り成しです。執り成しの祈りの根拠はなによりもイエス・キリストです。主イエスは今、生きておられ神の右にざしておられ、わたしたちの祈りを執り成していてくださるからです。5節に「神と人との間の仲介者も、人であるキリスト・イエスただおひとりなのです」仲介者が執り成しをしてくれます。わたしたちは「イエス・キリスト御名によって祈ります」と言って祈ります。主イエスに執り成していただいているのです。主イエスの執り成しを信じている。主イエスが父なる神に、「この者も、わたしが赦したあなたの子供です。どうか祈りを聞いてやってください」と執り成してくださる。主イエスが執り成してくださるのだから、間違いなく父なる神は祈りをきいてくださいます。だから、わたしたちは地上においては、祈りを必ず聞いてくださるこの主イエスの執り成しを信じて、人の執り成しをするのです。わたしたちはこの執り成しの祈りを、教会の交わりの中心にしたいと思っています。楽しい会も必要ですし、学びも必要です。食事も大事。すべて教会でやるべきことです。けれども、そのすべてにおいて、教会の仲間のことを思い、互いに祈りあう、主イエスの名によって執り成しあう祈りが生まれるのが教会の交わりです。堅苦しくしたり、形式的にお祈りをすることを目指しているではありません。互いの状況、それは体調かもしれないし生活かもしれない、もちろん信仰のこともあるでしょう。それが、よくてもわるくても、神にうちあけることを一緒にするのが執り成しです。

もしよいものが与えられているのであれば、その神の恵みと祝福の感謝を神に述べるのは当然のことと思われまます。自分のことも感謝し、人のことも執り成しのなかで感謝の祈りとしてささげるところにわたしたちの教会があります。

ただし、祈りは願いと執り成しと感謝だけに限定する必要はありませんから、ここでは祈りということを大きく一つにとらえることも必要だと思ひます。祈りにおいては、わた

私たちは主の御名を賛美し、神への信仰を言い表し、主の御業を数えてほめたたえることもします。道を求めて祈ることもあります。罪を告白し、悔改めを述べ、赦しを求める祈りも必要です。何をしたらよいか、どこへすすめばいいかと戸惑いの中、それこそ御心を求めて祈ります。困難なときに、嘆いて助けを求めることも許されています。祈りはこれほどまでに豊かなのです。その中で、交わりにおいては執り成しの祈りが中心となってくる、執り成しによって交わりをつくっていききたいのです。

そして、興味深いのは最後に「すべての人々のためにささげる」ようにとすすめられていることです。わたしたちは、自分のために祈ります。眼の前の教会の友のために祈ります。また、教会全体のためにも祈ります。しかし、そこにとどまらず、世界、人類といってもいい、あらゆる人のために祈るのです。教会の祈りはすべての人々のためにささげられます。もちろんわたしたちは、世界のすべての人のことを知っているわけではありません。おこっていることをすべてを知っているわけでもないし、知っていることだけでもすべてをならべたてることもできません。それでも、できる限りにおいて、わたしたちはすべての人の願いと御心になるようにと執り成して祈るのです。

3節にあるように、祈りは神の御前によいことであり喜んでくださることです。こんな祈りを神様が喜んでくれるのか、と思いますけれど、信仰において心を打ち明けることそのものを神は喜んでくださいます。子供がほしいとおもっているものを親はすでに知っていることがあります。それでも、口にだしてこれがほしい、と頼んでくれると、それに応えたいと思う、嬉しいことです。父なる神も、たとえたどたどしくても私達の祈りを喜んでくださいます。

その神への祈りを執り成してくださる主イエスは、ご自分をすべての人々のための贖いとしてその身を十字架にささげてくださいました。そのことでわたしたちは神に赦されて和解していただき、神との交わりに入れていただいているのです。わたしたちの交わりの源はここに 있습니다。教会の交わりは神の交わりの中にあります。大胆に言えば、地上にある神の国である教会においてわたしたちは神の交わりをつくっているのです。

今年度も御言葉の礼拝から生み出される教会の交わり、執り成し、執り成される歩みを続けていきましょう。